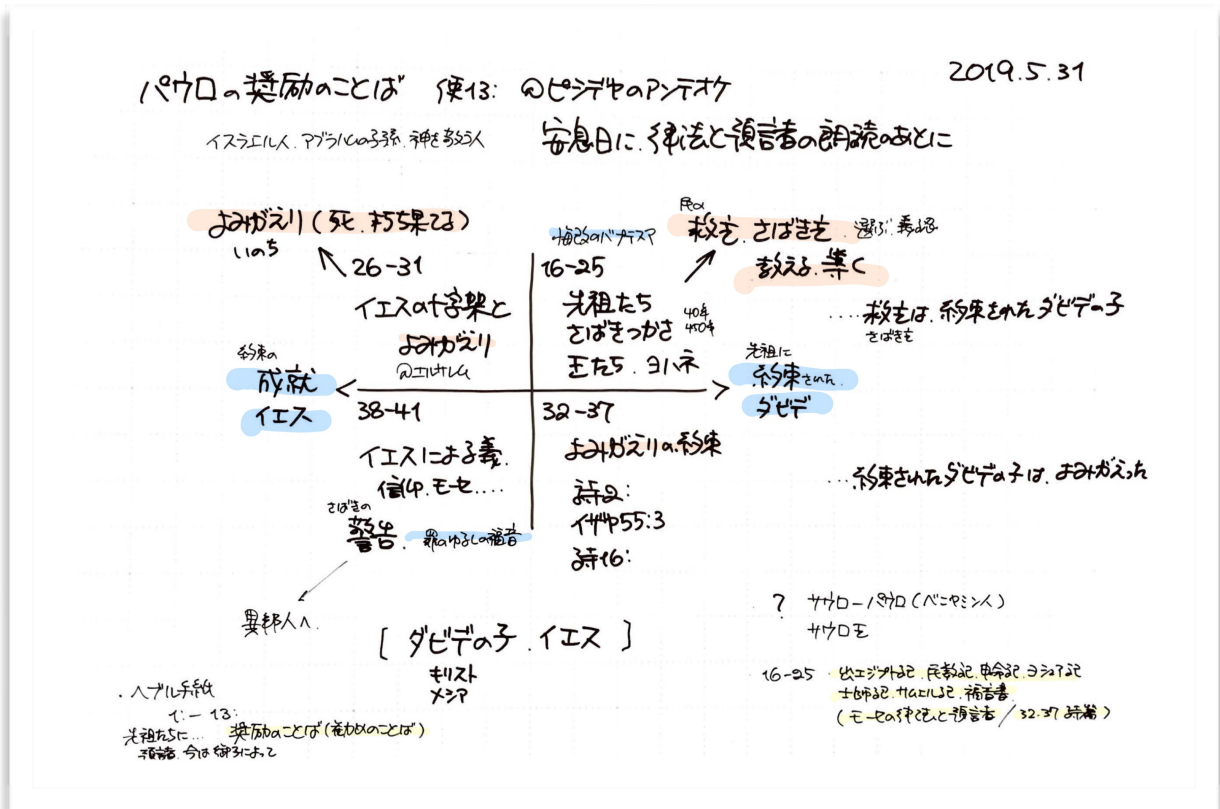




使徒の働き 13章 パウロの奨励



13章の16節から13章の41節までの箇所です。アンテオケに教会が始められて、そこからパウロが送り出される。バルナバとパウロが送り出されて、ピシデヤのアンテオケという所に行って安息日に会堂に入りました。律法と預言者の朗読があつてから「すすめの言葉があつたら話してください」と言われてすすめの言葉を言う箇所です。

16節から41節までの中に、イスラエルの歴史を要約しているような箇所があります。ステパノの証言のところにも、古い時代の歴史が要約されている箇所がありましたけれども、パウロも同じようにイスラエルの歴史を語りながら、イエスについて証しするという事です。この箇所は4段落(16-25, 26-31, 32-37, 38-41)に分かれてるんじゃないかということで分析をしました。

面白いところでは、この中にも「安息日ごとに読む預言者の言葉が成就した」ということが証言の中にあります。安息日に律法と預言者を朗読された後の言葉です。16節から25節までは、出エジプト記、そして民数記と申命記、ヨシュア記19章、さばきつかさの士師記の時代、サムエルとサウルとダビデということですから、これはサムエル記です。それでイエスが送られて、その前にヨハネが悔い改めのバプテスマを説きましたということですから、ここが福音書ということで、出エジプト記、民数記、申命記、ヨシュア記、士師記、サムエル記、福音書というストーリーの要約がここに入っています。

なぜこの箇所(21節)だけに、ベニヤミンのサウロの話が出てくるのが不思議な感じがしますが、その前に「パウロはサウロという名前でした」という箇所に続いているとこ

ろなんですけれど、考えるようにということだと思います。この箇所が、40年、450年、40年というような数字、4, 4, 4とくるところもこの箇所がひとつだということが言えるのだと思います。「イスラエルの人たち、並びに神を敬う人たち、聞いてください」と、26節のところで「アブラハムの子孫の人達並びに神を敬う人たち」ということです。ここ、16節と26節が並行して、26節からはまた新しい段落の始まりということなのです。

(26-31)「その約束されていたダビデの子孫、救い主イエスが来たのにも関わらず、安息日ごとに読む預言の言葉が成就して、十字架上で殺しましたが、死人の中からよみがえりました」という箇所です。

そのよみがえりましたということは預言されていました。先祖たちに約束されていたということが32節から37節で言われます。詩篇2篇、イザヤ53章、詩篇16篇というこの預言の約束、「約束、約束」の言葉が成就してよみがえって朽ち果てることがないという箇所がここ(32-37)に書いてあります。

それでその証言の言葉に従って「兄弟たちよ、このことを承知しておくがよい」と言って警告するわけです。イエスによる罪の赦しの福音、律法ではなくてイエスを信じる信仰による義、その書いてあることが自分たちに来ないようにという箇所が、最後のところですね。この4番目の段落(38-41)ということなのです。

最初の段落(16-25)が先祖たちに言われてたところです。32節から(32-37)のところも先祖ダビデに、先祖たちに約束されたということですから、この1番目と3番目の段落は、「先祖たちに約束されたダビデ」。救い主は約束されたダビデの子です。その約束されたダビデの子は絶対に朽ち果てませんという約束ですね。この約束が成就しましたが、最初の2番目のほう(26-31)は、イエスはそのダビデの子である。そのダビデの子はよみがえりました。そのよみがえりのイエスが約束の通りによみがえったので(32-37)、そのイエスを信じるかどうかによって裁かれますよ(38-41)ということと言われて、警告されるというのが、この38節からのところですから、26節からのところは、約束が成就した38節からのところで、この約束が成就しないように気をつけろということが言われています。

約束(16-25, 32-37)と成就(26-31, 38-41)。ダビデに約束されたダビデの子が約束を成就すると言われていたことに対して(16-25, 32-37)、その約束が成就したのはこのイエスによるのですということが証言されている(26-31, 38-41)ということなのです。

最初と(16-25)に悔い改めのバプテスマをヨハネが悔い改めのバプテスマを宣べ伝えていた4番目の段落(38-41)でイエスによる罪の赦しの福音と言っていますが同じことですね。同じことになるとは思いますけれど、この最初の段落で先祖を選んで、さばきづかさをつかわして、サウロをつかわして、ダビデを立てて、救い主としてイエスを送って、ヨハネを立ててみたいいな感じですね。民の救い主、さばき主、教える者導く者を与えました。悔い改めることを最初に言って、ずっと待っていたということですかね。40年、450年、40年ずっと悔い改めるように導いてきたその導きは、(4段落目)実はイエスを信じるようにメサイアを信じることによる義をあらわしている者としての預言だったということでしょうね。

罪の赦しの福音、その待っていたダビデの子を信じることによって義とされる、憐れまれる、裁かれないということですね。さばき主が来るのですけど裁かれない、罪が許されるという救い主が来るというこの並行があるのだらうと思います。こちら(1, 4段落目)が義と認められるとか救われるというほうです。こちら(2, 3段落目)は死に対して

勝利を得るという義(1、4段落目)について、命(2、3段落目)についてという並行があるんだらうと思います。義(1段落目)とされるものが永遠の命を受ける(2段落目)。永遠の命を受けた者(3段落目)に信頼するなら義と認められる(4段落目)というようなつながりになってるかと思ひます。

全体としては、ダビデの子に信頼してる人たちなんですね。イスラエル人、アブラハムの子孫、神を敬う人たちに向けて語ってる奨励の言葉ですから、ダビデの子に信頼してる。メサイアはダビデの子、そのダビデの子が来るということのを待っている人たちに、このイエスはダビデの子、キリストメサイアですよということのを証言している。それがすすめの言葉です。ユダヤ人たちに対してのすすめの言葉というのをもっと長く説明しているのが、ヘブル人への手紙という書物、手紙ですね。その中で約束もたくさん出てきます。「神は昔、先祖たちに預言者たちを通して多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られましたがこの終わりの時には御子によって私たちに語られました」というところからヘブル人への手紙が始まる。最後のところで「兄弟たち、このようなすすめの言葉を受けてください。私はただ手短に書きました」この手短に書いたヘブル人への手紙は、すすめの言葉と書いてありますけど、これが奨励の言葉と全く同じです。ですから、ヘブル人への手紙全体がパウロが証言していることをもっと長く説明しているということになると思ひます。

古い時代、最初の始めの時代に先祖たちに約束されたダビデの子がイエスキリスト。そのイエスが来て、律法と預言者を成就しましたということのをピシデヤのアンテオケの教会で、すすめの言葉と言ってすすめます。残念ながらこの言葉を聞いた人たちが、パウロに逆らって聞く耳がないので、「異邦人の方に行きます」とパウロが言うきっかけになる奨励の言葉ということなんです。